

感情と知覚のはじまり

——保育研究ノート(1)——

大 谷 光 長

個人としておよび社会的人間として、私たちの思考や行動様式がどのようにして発達され得るかを理解しようとして、それを幼児という発達段階で試み、明らかにすることは困難であるといつてよい。が私たち大人の抱いているさまざまな思想が、新生児や幼児の立場でそのおとなさのゆえに見出され得ないという態度には、批判の余地がある。たとえ幼児たちが彼等の生命の燈火を得た最初の日から、大人と同じように思考することはできないとはいへ、彼等は強く、しかも彼等自身の全体から何かを感じることは想像される。事実、彼等は何かを感じる。嬰兒たちの意識や知覚が発達するにつれて、比較的短期間のうちに感情という基礎的原種から、間違いもなく空想力や心のなかでいろいろのイメージを思いえがく精神的活動が発生し、そして成長しはじめる。スピッツ博士は(Dr. R. Spitz)感情をその後の一切の知覚と発達の推進力(the 'trailbreaker' of all later perception and development)であると規定し、また情動的飢餓は身体的飢餓と同様、嬰兒の全体的健康に悪い影響を与えるという。(スピッツ著『嬰兒における危難と情動的飢餓の肉体的影響』)けだし感情は身体と精神との双方に依属し、またのちのちの生活の思考過程の基礎的基盤を形成するものである。感情は私たちの極めて粗末な生物学的資源から私たちを漸次導き、やがて科学、芸術、宗教ならびに哲学の扉の奥へ誘い、掛かり合わせ、さらにはいつでも私たちと他の人や社会と

の関連性に影響を及ぼす。

たとえば私たち大人でも楽しさ、苦痛、不安および興奮等々の事情で、あるいは身体あるいは精神を通して、ある肉体的反応を示すのがふつうである。すなわち、私たちが何か心配事で悩んでいるときは、おそらくものを食べても十分に消化されなかったり、あるいは熟睡できなかつたりするのであろう。また私たちは交通事故を目撃した場合、一瞬あたかも私たちが実際にその不幸に遭遇したかのような気持になる。この不幸な事故を目撃したということは、間違いもなく私たちに肉体的影響を与え、また不安をもたらす。つまり私たちの副腎が刺激され、そのため心臓の鼓動が早くなる、他方また汗腺が刺激され、そして順次毛細血管の圧縮を生じる。しかしこれらの原因のうちどのいづれをとってみても、私たちは一つの肉体的ないし情動的衝撃で束縛されて身動きできないかというところではない。というのは、私たちは直ちに私たちの所有する特殊の諸感情や意味づけでその経験を圍繞しはじめる、つまり恒常的に一つの觀念が、よしんば私たちがそのことに気づかないにしても、思想の長い鎖でつながれた「ある新しいもの」へ私たちを導くからである。

かように、私たちが生を享けた最初の日から、感情は基本的な推進力として私たちの生命を支えてきた、またときとしてさまざまな連続的な経験や多くの思考の外面的合理化が私たちの生命力を支配する場合には、感情は意識的認識にとつてなんの役割も演じないと思われるかもしれないが、事實はそうでなく、感情は私たちの知覚の表層下にあつて、思考と行動の方向を決定する役割を果していると考えべきである。思うに、感情は人間の生のはじまりと共に生じる。新生児がいまだ外的世界について何一つ経験するところがないときでも、私たちは彼の感情の所有を否定することはできないであらう。新生児たちが漸次大人の方向へ発達して行くにつれて、彼等がどういふ感情を抱

くのかを理解しようとする試みのなかで、私たちは以下の事柄を正しく了解しておく必要がある。つまり、乳幼児期に実際に起ったかもしれないものこそ、彼等ののちのちの人生に強く影響を及ぼすものであり、またそれだけでなく彼等がその当時感じたところのもの、すなわちどのようなとき彼等のさまざまな経験を解釈したかということこそ、彼等をして彼等のあるところのものたらしめるのに、重要な掛り合いをもつのである。たとえば、ただ今私は四十五歳である、が同時に三十四歳でもあり得るし、二十四歳、十四歳またはそれ以下でさえあり得る。私はこの世に生を享けた初期の歳月のうちで、私がそれでもって私の世界をおしはかりまた明記する私の内的感情を、そしてそのなかで私に生じたすべてのものを間違ひなく心の奥底に宿している。言葉の厳密な意味で私のこの深い内的感情こそ、それ以後の私の発達に善悪いずれにも強い影響を与えてきたことを、経験的事実として知っている。

一、感情発生の諸要因

私たちの感情の発生に影響を及ぼす重要な要因が明らかにされる必要がある。個々の人間は、言葉の正しい意味で個人である。そしてこのことはたとえば眼の色、髪の色のような私たちの容貌にあてはまるだけでなく、また私たちの構造、体質ならびに成長のさまざまな面にもあてはまる。一卵生の双子児でさえ、よしんば普通の兄弟姉妹と比較して一層その類似性が見出されるにしても、両者は完璧なる「リコピー」による複写」ではない。

周知のように、私たちの生物学的遺伝は極めて複雑なものである。私たちの両親は、私たちの発生的構造をもたらした。しかし事實は、その発生的構造の形成にあたって私たちは両親からだけでなく、無数の祖先から実に多くのものを受け継いでいる。それゆえ私たちの系譜

を辿ってみるとき、私たちの身体的精神的構造に影響を及ぼす無数の巨大な遺伝のネットワークが見出されるであろう。思うに私たちは誕生のときから、人それぞれの感情や感受性にとってユニークな才能をもっている。ワトソン (J. B. Watson) の、心的活動が刺激要因によって一義的に決定されるという考えまたは立場は、それが行動におけるすべての先天的内的条件を否定するがゆえに、今日の心理学では重視されていないことは大きな意味をもっている。(ワトソン著『行動主義』) どうして二人の人によって同時に経験された同じ出来事あるいは境遇が、それぞれさまざまな感じられたり、解釈されたりするのであろうか。また同一の不幸な境遇や誘惑の危険にさらされている二人の兄弟が、なぜある場合には感化せられず、他の場合にはぐらつきそして過失を犯すのであろうか。けだしこのことに関する理解は、私たちに当面の問題の解決に一条の光を与えるであろう。

一般に人間は生れつき悪あるいは善であるというのではなく、さまざまな感情と判断とが、彼をして種々に反応させるということであろうか。というのは、すでにのべたように私たちの遺伝的背景それ自体は十分複雑なものである、またそれと共に私たちが入り行く外的世界——個々の家庭を含む——のなかに、私たちを形成するにあたって十分考慮に値する他の活動的諸力の存することが認められるからである。この場合なかんずく相互の、また子供たちそれぞれに対する両親の態度が注目される必要がある。

さてこれらの要因は種々に変化し、また私たちの出生の瞬間から——厳密にはそれ以前からといってよいが——私たちの環境を構成するものに支配的役割を演じている。各子供の、彼等の両親の態度に対する反応、そして各両親の、子供たちに寄せる初期の諸感情は、同様に環境に影響を及ぼす。さらにそのうえ各幼児のいわば世界となる、つまり彼の両親たちが子供に関して要求し、また承認する、ときには承

認しない諸事物に影響するに違いない地域社会のさまざまな習慣や態度が注目されねばならない。もちろん、各世代は先立つ世代の種々なる習慣や伝統を改善し、進歩させることを心掛ける。事実、つねにまたどこでも客観的環境においては当然のことながら、思考や見方や習慣のなかでも、次第に諸変化が生じる。

二、最初の感情——胎児および新生児

ところで一見して漠然とした、また変り易い背景としての感情それ自体に、私たちは大きな期待を寄せ、それだけにその健やかな発達を意図するとき、不安がつきまとうのは避けられない。というのは、感情は私たちの承知しているように、生命のその当の真髄を保持する、つまり生と死とを区別するあるものを含んでいるかのように思われるからである。いったい私たちは人間の初期の段階における諸感情について、どれほど認識しているのだろうか、またそれらの感情はいつ、どのようにしてはじまるのであろうか。思うに、子供たちの心のなかに感情と知覚とが覚醒するとき、私たちがそれらについて十分の理解をもっているならば、その結果として子供たちの健全な発達の可能性はより大きくなり、人格性の歪みはずっと少なくなる、また不幸と墮落の危険は今より一層少なくなつて、より大きな人間の幸せがもたらされるといふことが期待されるであらう。

胎児のより活発でかつ一般的な諸運動は、通常の場合妊婦の最終月経から第十六週ないし第十八週までは認められないといわれている。ところでエリス博士 (Dr. R. W. B. Ellis) の研究によると、妊娠三ヶ月程度の時期で、筋肉の運動が酸素の欠乏に応じて胎児の呼吸運動を可能にする。(エリス著『幼児期の健康』またシャロナー (L. Chaloner) の指摘するところによれば、妊娠三ヶ月以後の胎児の心電図は、胎児の心臓の鼓動が母親の興奮をもたらしことを示してい

る。(シャロナー著『幼児たちの感情と知覚』うえの二つの事実は、感情の發生に与える諸条件を暗示するものと考えられる。たとえば、リブル博士 (Dr. M. Ribble) の論文「嬰兒の経験」がこのことを立証する。博士は自宅で生れた若干名の嬰兒と、なお三ヶ所の産院で生れたおよそ六〇〇名の新生児について調査する。そして過度の酸素欠乏が、分娩をはじめまた援助する伸筋の反応に刺戟することを理解する。現実の分娩過程は酸素の供給をますます減じ、そしてあまりにも長びく陣痛の苦しみのなかで、あるいは母親のあまりにも長すぎた知覚喪失のなかで、精神的危機が新生児に間違いなく訪れることが知られる。リブル博士ののべるところによると、博士は人間の子供の、不安に対する内面的先天的素質を確認し、その限りフロイト (S. Freud) の理論に同意する。

嬰兒は誕生するということで、彼の母親からの完全なる分離を経験する。そしてこのことは、すべての意味で多量の生物学的変化が彼に課せられることを意味する。彼の母親はもちろんのこと、これら課題の達成に手助けする人、つまり彼を世話する人々は、新しい環境に対する彼の構造的適応能力の育成に努めねばならないであらう。リブル博士の観察によると、嬰兒は脳や神経組織の全くの不完全さのために、ひき続き機能的混乱の危険に直面している。というのは嬰兒の呼吸機構は、前脳の急速な発達によってひき起される欲求の増大と共に、適宜に作用するよう十分に発達されていないからである。したがって母親にしても、また世話する人にしても、彼女たちが新生児に対する態度は、呼吸作用と連合された反射機構を続けて活動させることであり、また新生児の感覚中枢の神経組織を活発にさせることである。このことはリブル博士ものべているように、「感情欲求 (a need to feel)」であり、またこのことは嬰兒が彼の母親との関連を通じ、および母親との身体的接触の刺戟を媒介して最もよく充たされるであ

ろう。

新生児誕生初期の数ヶ月間に見られる、脳細胞による酸素の不十分な消費と脳傷害との間の可能な関連に注目して、リブル博士は以下のような考察を展開する。臨床的観察の最も価値ある諸結果の一つであると思われるが、新生児の呼吸は単に彼が生を享けて以後の最初の二週間だけでなく、三ヶ月の長期に亘って不安定である。この時期に泣くのは、「十中八・九まで脳への酸素欠乏から生じる部分的窒息によって刺戟された非常な場合の反応の一形式であり、他方呼吸と発達の脳組織の同化作用との間には、活気ある関連が見られる」と博士は結論する。この結論にしたがえば、およそ誕生して六ヶ月以内の嬰兒を、肺活量が増大するという理由だけからひとりで泣くままに放任する育児法は、その子の健全な心の発達の側面からいって、「百害あって一利なし」と断定せざるを得ない。

三、新生児と不安

かくて、嬰兒と彼の母親との人格的接触が——彼女の継続的な愛情と世話が——嬰兒の健全な発達にとって、極めて重要であるということとの生物学的根拠が明らかにされた。そしてこの主張は同時にまた、嬰兒が急いで必要とする基礎的な諸々の満足の与えられるよう、誕生初期の数ヶ月間の母乳の授乳価値を強調するように思われるし、あるいは嬰兒のフラストレーションや意志の喪失をもたらす日課表ではなくて、嬰兒自身のいわば作成する日課表の意義が、クローズアップされる必然性を示す。

新生児は胎内では固定的で動かない環境を経験しない、彼はいつでも振動した多少とも動揺している環境を経験してきた。したがって私たちが嬰兒の生れる前の状態と彼の出生によって必要とされる巨大な適応量に思いをいたすとき、揺り籠のような保育設備や揺り椅子等

について、それらの重要性を指摘することをちゅうちよしてはなるまい。育児の経験者の観察によれば、新生児の最大の不安の感情は、入浴のため脱衣する際の彼の身体のまわりに一種の間隙が生じるといふ感情によって喚起される。かかる不安は、一種の習慣のシステムの破壊によって生じるものと解釈できる。というのは、嬰兒はあたかも大気のなかで落下するのではないかと感じかつ振舞うかのように見えるからである。一般に、これは大人の失神と同一視される感情と考えてよい。事実、嬰兒は彼の小さな握り拳の両手を空中にふりかざし、左右に動かしながら心配と不安とで泣く。ところが一度び温水のなかに入れられると、そのポーズは急変する。嬰兒は彼の誕生前の位置にくぶんほど近い状態におかれ、喜びに満ち、安堵してうしろによりかかる。温水につかることは、彼にとって心地よくすでに十分経験済みの親密な環境にある感じであり、そのため完全にリラックスした気分になり得るのである。誕生後一週間を経て、母親がわが子の衣類を脱がすとき、彼にも静かに話しかけ、またできるだけ彼を厚手のタオルで暖かく包み、その小さくかれんな両手を握りしめてやるならば、彼女はわが子の抱く不安を少しでも和らげることが可能であろうし、場合によっては彼のうえに心地よい影響を及ぼすかもしれない。一般に嬰兒をこのように取扱うのは、彼の精神発達の側面からみて極めて有益である。というのはすでにのべたように、「接触」は人間形成において重要な要因であるからである。かような取扱いは受けて、はじめて嬰兒は彼の母親に触れる。もちろん、嬰兒はのちほどより自由に動き廻ることができるようになるにつれて、多くのものを学習する環境のなかで多数の他の事象に触れ、知的、感情的、意志的に影響を受けるであろう。総じて、嬰兒に対する気まぐれな取扱いや短かな世話のしかたは、彼の心のなかに極めて容易に不安の念を醸成する、そして嬰兒は他の理由ではなくて、かかる無経験でぶきつちよ

の取扱いのために、あるいは気難しくなり、あるいは泣きわめくように思われる。

多くの若い母親や保母は、嬰兒のこの世のなかへの骨の折れる旅立ちに際して、極めてドラマティックに立会う。彼女たちは彼にとって全く新しいところの諸条件を理解せねばならず、また彼がうける世話のしかたがいかにすばやく彼の諸感情を育成しはじめるかを知る必要がある、さらに彼をしてあるいは満足せしめる、あるいは不安にさせる事象に人一倍敏感でなければならぬ。最初嬰兒は呼吸する彼の肺、見ようとする彼の眼、ならびに飲むとする彼の口を使用したい欲求から、あるいは光に、あるいは彼の周囲の空間事象に出会いながら認識を拡大して行く。思えば、彼のおかれている状態は、大人のおかれている状態も同じことであろうが、彼にとって全く見知らぬものといつてよい。新生児の両眼はかなりの期間焦点が合わないため、周囲のものを見ることができない。彼の呼吸作用や血液の循環は、すでにのべたように次第に適応されねばならない発達段階にある、そしてその間彼は自分では何一つできず、全く依存性のなかにある。彼は彼に寄せる両親の愛情について知ることなく、また両親が彼の出生や育児のためにしてきたいろいろの準備、配慮について知るはずもない。嬰兒はただ彼自身のさまざまな感情を経験する。着衣ないし脱衣は、彼に不安感を抱かせるのであって、それ以外のなんの意味ももっていない。あらゆるあるいは何かの彼の苦痛や欲求から、彼はただ「作りつけの抵抗——大声で泣く——」をする。

四、嬰兒のニードの理解と「接触」

多くの若い母親たちが彼女たちの子供の世話をする際、理解力と感受性を欠いているように思われるにしても、彼女たちの責任の遂行の不十分さを追求することは酷といつてよい。数多くのケースからわ

かるように、彼女たちは前もって乳児や幼児たちをどのように世話したらよいか、「確たるもの」を所有しているわけではなく、事実はそういったことに関してほとんど何も知らないといつてよい。というのは、理論的知識が実践を指導するに至るには、経験ないしは体験を媒介としてはじめて可能であると考えられるからである。今日ではほとんどの母親は、子供が生まれるまで仕事をもっている、そして彼女たちは他日いつかはまた仕事に従事することを考えているのがふつうである。また多くの産院で母と新生児との相互の出会いの偉大な瞬間が、あるいは二人の責任ある関係者の立会いの下で、あるいは新生児をとりあげた助産婦と看護婦などの立会いでもたれているが、いずれの場合でもごく僅かの時間であることに変わりはない。やがて新生児は、隔てられた育児室に急ぎつれ戻される、そして彼の母は翌朝「小さな見知らぬ人」であるわが子に面会する。その後母乳を授乳するようになつて、母は三時間あるいは四時間間隔でわが子に会うことができる。

旧態依然とした設備のなかで、また僅かな人数のスタッフで仕事をせねばならない産院の数は多い。しかしそれにもかかわらずそこに勤務する看護婦たちは、立派に職責を果している。若い母親は赤ん坊を生んでしばらく産褥にあるとき、彼女は「憂うつ症」として放任される孤独と線香花火的結末との奇妙な気の重い感情を経験しがちである。母親の、わが子の誕生という待ちに待った瞬間は過ぎてしまった。そしてあらゆる事柄が、一仕事したあるいはわが子を生んだという実感で、および待っていた長い十ヶ月の後の、またわが子の誕生という厳しい試練の後でのわが子との密接な母親としての関連性で、彼女をひとまわりもふたまわりも大人にするのに役立つ。母子別室制のシステムを採用している産院の場合、隔てられた育児室で新生児を養育するということは、当然母からの隔離によって生じる諸影響を

受けるので、可能な限りこれらの影響をくいとめるよう努力される必要がある。また母子別室制あるいは母子同室制のいずれのシステムが採用されるにせよ、一般に新生児は「小児用のベッド」に寝かされるのがふつうである。新生児は、一見して收容されているという状態にある。というのは、小児用ベッドは固定的であつて可動的でなく、嬰兒はそのなかで彼自身の位置をかえることができないからである。彼は胎内にあるとき、いろいろな面でリズムカルに調子正しく鼓動する気持のよい環境を経験済みである。したがつて誕生前と後との環境適応の条件を考慮するとき、「小児用ベッド」の改善が焦眉の急とならう。

新生児は母に抱かれて授乳されるとき、また着代えをされる際、および入浴するときの僅かの時間等を除いて、人と人との触れ合いをまるで経験しない。母との接触の心地よき安全性にある彼にとつて、母の授乳は極めて重要な意味をもっている。ところが、産院での日課はすでに指摘したように、総じて新生児固有の五体に適しているとはいえない。もちろん日課表は、育児室での養育に際しての組織的、本質的領域を、背景に所有すべきはいうまでもない。新生児は彼の不自然な環境に、泣くことで抵抗する。そして彼の泣くとき、彼の条件がはつきり身体的に悪いと判断される場合にのみその条件をかえるよう配慮されるのがふつうである。

生後一ヶ月以内の嬰兒たちの泣くのを、一九五八年頃から研究してきたアルドリッヒ博士(Dr. A. Aldrich)らの報告によると、嬰兒が最高調に泣くときは、看護婦たちが育児室での赤ん坊たちの諸要求に直接注意できなくて、何か他の日常の仕事に忙しく従事しているときであつた。アルドリッヒ博士らの調査研究は、まず嬰兒たちの泣く原因——空腹である、腹が痛い、窮屈である、部屋が暑すぎるあるいは寒い等——をつきとめるよう努力される必要性を強調する。はつき

り原因がわかると、その原因に應じて嬰兒たちはあるいはだきあげられ、あるいはあやされ、あるいはベッドに寝かされる前にしばらくの間だっこされるであらう。次に、猫の子たちが誰にも邪魔されることなく経験する、彼等と母猫とのナチュラルな密接な接触と同じ性質のものを、嬰兒たちも望んでいる。もしもそのことが叶えられないとき、嬰兒たちは生物学的に一まつ淋しさを感じてして大声をあげるということが理解される必要性がある。博士はかかる現状分析に依拠して、育児室のスタッフを再組織する。具体的には嬰兒のこの種の要求に應ずる特殊の役割をもつた看護婦の配属ということで、この問題の解決を画した。その結果、生後一ヶ月以内の嬰兒たちの泣くのが急激に減少し、彼等の情動的安定が涵養されるに至つた。(レン・シャロナー著『幼児の感情と知覚』)

イギリスの産院の実状報告によると、かの地の産院は新生児用のベッドを——実際は小児用のベッドであるが——母のベッドの傍において、母と子との自然的で密接な接触の欲求を満足させることによつて、如上の問題の解決をはかつている。なるほどかかる状態においては、母親はわが子の世話をときには手助けすることができ、またわが子を見て心の安らぎを感じるし、そしてわが子の欲求に應じて授乳することが可能である。彼女は産院にある間、専門家から有益な指導を受けて、わが子の養育について多くのことを学ぶのである。さきによつとふれた日本の母子同室制も、その狙いとすると同しである。しかし残念ながら、かかる試みはいまだテストの域をでないようである。

さて、嬰兒が心に抱く「淋しさ」について、さまざまの研究がある。しかし肝要なことは、嬰兒の淋しさを解消する多くの手立てを考案することよりは、母と子との自然的で密接な接触の実現方を配慮するほうが、より健康的でありかつ一層効果的であるということである。

う。人間を対象にした孤独実験の結果が報告されている。被検者を裸にして、身体と同じ比重で体温と同じ温度の液体のなかにいれ、顔には呼吸や食事のためのマスクをかけ、暗黒の無響室のなかで身体を動かさないように命じておく。このようなきびしい孤独条件では、数時間もすると精神的肉体的にパニックの状態になる。(時実利彦著『人間であること』)男性や女性たちが若干のあいだ外的接触を禁止され、ある部屋のなかに一人づつ閉じこめられると、彼等は強度のフラストレーションの感情や混乱ないし集中能力を喪失したある不安な状態におちいる。嬰兒の場合とて同じであろう、注意したいものである。

産院で生れた新生児は、ふつうの場合八日めか十日めには自宅に帰る。もちろん未熟児はその限りではない。彼は相当長く産院で生活する。早生児保育器のなかで生じる、未熟児の孤独ゆえの可能な有害問題は、すでに医学の研究領域では問題視されている。しかし医学徒の問題意識においては、早生児保育器は生命を救うという認識が依然として優勢である。ところで、月満ちた健康な嬰兒は、彼の自宅に帰って彼の母や家族と共に生活しながら、社会的諸条件をいろいろと経験する。なかでも人間的接触に対する本能や人格的レベルでの人間に対する本能は、生涯を通じて私たちにとって基礎的のものであることが留意されるべきである。私たちは世の男性や女性たちの、彼等の密接にして永続的な結合に寄せる本能的関心のなかに、かかる衝動の深さを見出すであろう。確かに私たちはこのことを、ただ乳幼児期のごく初期の数年間だけでなく、また人生の終期においても見出す。すなわち意識が不活発になった、文字通り死に瀕している人が、親しい人の手を握り、見えにくくなった眼をしばたいて親しい人の顔を見ようとする態度は、何よりもそのことを物語っている。どのような形式であれ、人間が人間に接触したいということは、個々人にとって基礎的欲求であらう。

五、知覚の発生——関係意識の目覚め

さて、乳児はいつ頃から個人としての自己に目覚めるであろうか。もし彼が彼の最も初期の諸感情を通して、最初に「意識と知覚」を発達するいくつかのやり方を観察しようと思えば、私たちはそう永く待つ必要はない。乳児は間違いもなく最初の数ヶ月を経ずして、彼の発達のうえに広範囲な影響を及ぼすさまざまな事実を提供する。

誕生後およそ四ヶ月を経過すると、嬰兒は彼の母親が彼のところへ近づくのを見て、両手をさしだし、また口を開いて何かを訴えようとするのが見かけられる。それ以前には、嬰兒は母親の微笑に応じて微笑した、が今や母親が彼に近づいてくるといふことで、彼はだき起されるということと授乳されることを連想する。というのは、こういったことが、母と子との間で以前からずっとおこなわれ続けてきたからである。この行動は、条件反射の理論で説明されるのがふつうである。しかし私の推察によれば、嬰兒は不断の繰り返しのことによってその行動を期待しはじめる、したがって基本的に嬰兒は「想起する機能」をもっている。嬰兒は、もしも彼が「想起する機能」をもたないならば、「期待する機能」をもち得るはずもない。彼は「想起する」という最初の段階から、次第に「時」を理解するようになる。もちろん具体的には、何かを想起したり、何かを期待したりしてであるが。やがて「昨日」および「明日」といった觀念が、幼児に若干の意味をもってくる。かくて幼児は日が立つにつれて、同型の理解と知覚とが彼の内面的および外面的経験の刺戟をうけながら、より一層直接的な個人的「昨日と明日」に対する興味をいだくようになる。この対象はいったいどこからきて、またどこへ行ってしまうのかということに対する興味がそれである。もちろん「昨日」とか「明日」の正しい概念使用は、小学校の一年生に期待すべきであらう、がそれにかかわる知覚の

発達は、零歳児において可能であることを主張したい。そして最初の知覚の段階は、まるで水面に投げられた小石で生じる水輪のように、順次広がって行くのが見られるであらう。

私たちは幼児と新生児たち（基本的には自分自身）との関係が、あまりにも不可避的であることに気づく。彼は赤ん坊がどこからくるのか、またどのようにして大きくなるのかということに関心をもちはじめ。一般に、嬰兒は零歳児の折でさえ、彼自身と彼の周囲の人との関係を知覚することができるといわれている。事実程度の差はあるにしても、自分はどのようにしてこの世に生を享けたかということに関する興味、宇宙の起源に寄せる関心と共に、いかに幼い時期からまた継続的に幼児の心のなかに育って行くかということに、私たちは改めて注目する必要がある。幼児心理学は、基本的には人間心理学であるということをシャロナーはのべているが、私も同意する。

（昭和四十七年三月二十四日）